『GAME』とか…中二病か内の校長は…

おいおいまじかよ俺ってうんこだったのかよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『ＧＡＭＥ』とか…中二病か内の校長は…

【Ｎコード】
Ｎ７００５Ｒ

【作者名】
おいおいまじかよ俺ってうんこだったのかよ

【あらすじ】
ＧＡＭＥ。校長主催でゲームとは名ばかりの学園主催イベントが開始された。
割と生徒は全員対策が取れていた、準備バッチリの殺し合い。
…主人公、及びその幼馴染を除いては。

0（前書き）

どうも、感想クレクレー星人です

0

どうしよう、死にそう。
冗談でもなくこの言葉を使うのは初めてだった、いや冗談だけど。
ていうか死にそう、寧ろ殺されそう。
はぁどうしようこれは困ったな、困ったなう。
「なにか怪しい行動取った者は直ぐに撃ち殺すからな」
どうしよう。
なんか黒い服着た奴らがサブマシンガンらしきものを片手になんか脅しているなう。
そしてここは多分学校の教室、勿論自分のクラスの。
「どこの中二病野郎の妄想だよ」
「次無駄口叩いたら容赦なく殺すぞ」
普通に怖い、威圧感やヴぁい。
つまりは「ちょｗｗｗテロリストが学校来たｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」みたいなスレとりあえず立ててくるか。
てかあれだ、こういうことするメリットはあるのかいつも思う。
女を片っ端から食べていくのか？
きっと本人たちにはなんかメリットがあるんだろうけど。
俺としては関係ないような話だ、気にすることでもない。
そんなこと考えてる内にも有力な国家権力である警察様の（糞くらえだ）サイレンが聞こえてくる、とんだ無計画だなこの三下共。
この三下もサイレンの音が聞こえたのかこんな意味のわからない事を言い出した。
「あぁ、いいやもう片っ端から撃ち殺しましょうゲーム開始」
瞬間、短い爆撃音が連続として響く、銃特有のあの臭いが充満する、女子は悲鳴をあげてく、男が暴れだす。
地獄絵図より地獄絵図だった、いや悪くない。
やがて俺以外が全員床にキスをしている形になる。

意味わからんなんでやねんどういうこっちゃねん、思わず似非関西弁を使いたくなるほど意味が分からなかった。
「■■■■であってるよな？ついてきてもらおう」
そう言って俺の手に本来は有力な国家以下略、警察が使うであろう手錠をかける。
まさか俺の人生に手錠にお世話になる事があるなんて。
いやというか今理解した。
そういうことかよ、親父目当てかよゴミ共。
「黙れよ餓鬼が」
サブマシンガンの柄で殴られる、かなり痛い。
とりあえず黙る事にした。
「しっかしお前みたいなどこにでもいそうな奴がこの世界の最高権力者■■の息子だとはなぁ、この世界もよくわからんようにできてるな」
「拍子抜けだなこんなちっこいのがあの野郎の一人息子だなんてなぁあ！」
俺の周りには五人、俺を囲む様にして何処かへ俺を連行する様に歩いている。その俺の隣の奴が相槌と同時に俺を罵倒する様によくわからん事を言うと、周りの仲間らしき奴らははゲラゲラ下衆な笑い方をする。
こいつがリーダーだというのはすぐわかった、それだけで俺が行動する引き金になった。
「見くびり過ぎだろ」
同時に腕力だけで手に付けられていた手錠を思いっきり外す、これ正にワイルド。
「油断は禁物だって言うだろ、俺もそう思うよ。お前ら油断しすぎだろあの親父の子供なんだから只の子供なわけねぇだろ」
俺の親父舐めてんのか、こういう時の為に伊達に鍛えられてねぇよ。
奴らは驚き声も出ないというような顔をして、辛うじて俺に銃口を向けているといった感じだ。

チャンスでしかない。
「それにしてもお前らみたいなゴミみたいなテロリストは初めてだよ、身体チェックもしねぇとか」
俺は迅速に学生服の胸ポケに常備している大型ナイフを二本取り出しながら、前の奴の方がまだ面白かったぜと俺は軽くぼやく。
「ま、前のだと・・・？」
ナイフを取り出した時点でリーダーと思しき男がやっとのことでそう俺に聞いてくる。
俺は、
無視して大型のナイフを一つ相手の顔面に正確に投擲した。
「答える義理なんてあるわけねぇだろ、油断はいけないと俺は思うってさっき言ったよな」
そこからはっと気づいた様に他の四人もやっとサブマシンガンを構えて絶叫しながら俺に向け鉛の弾を打ち出し始めた、遅いんだよ。
まず回転するように一番近くに居た二人の首を確実に切り裂く、その回転の勢いを利用して持っていたあと一本のナイフを一番遠い黒服の首に投擲する。
残り一人、そいつがあっけにとられてる間に飛び膝蹴りの容量で頭に膝打ちを素早く打ち込む、相手はすごい勢いで後頭部からコンクリートの地面に激突して絶命したことがわかる。
勿論スナイパーがいる可能性を考慮して素早くそこから離れるのも忘れない。
因みにここまでの動作で俺が声を発してから五秒も掛からない。
こんくらいは出来なきゃすぐに殺されちまうからだ、俺はあいつの息子ということで割とこういう事は頻繁にあった。
実はこんくらいの事ならもう何十回も経験していたりする、その途中で何時からかこういう殺し合いの様な物が楽しく感じ始めてしまって今じゃ只の戦闘狂かもしれない。
数は少なくとも１００回は超えているが、途中から数えるのがめんどくなって数えていない。

そんな自らのここまでの道のりを回想しながらとりあえず外部と連絡が取れそうな職員室へ向かう。
「おいおいすごい血だが大丈夫か！？みんなはどうした！？」
そろそろ職員室へ着くな、という位の距離の辺りの階段からそう声を掛けられた。
担任の松下だ。簡単に言うと今時は珍しい熱血系の先生である。
「あぁ大丈夫です、これ返り血なんで」
「そうか！なんだよかった！」
なにがよかったのだろうこいつは、脳まで熱くなって考える事もできなくなったのか。
「俺がお前を殺せるのか」
思いっきり油断した、油断してしまった瞬間気づいたら腹部を撃たれていた。
と同時に納得した、寧ろこんな激痛の状態の中でも「あぁーそういう事かー」と呑気に相槌を打てるだろう。
現実問題、いつの間にかはわからんがこいつの手には黒い掌サイズ金属の塊のあれがこちらに向けられた状態で構えられていた。
おまけにその拳銃から撃った後の硝煙が銃口から煙草の煙のように漂っていた。
つまりは俺に向けられて撃たれていた、音がしなかったのはなにか細工が施してあるからだろう。
畜生、ほんとうに甘かった。
なんで教師がいるのかとか、内部にテロリストがいる可能性とか、なぜ考慮しなかったんだろう俺は。
だがこれもそれも過ぎてしまった事だ、この後の事を考える。
恐らくこいつは俺を殺す、殺されなくても俺は今日ここで死ぬ。
ならば何をするか、楽しい事をしよう。
「さて腹を撃たれちゃったわけだけどね、物凄く面白くて俺の持ちネタにしたいほど話していて楽しい話をしてやろう」
余裕の笑みを浮かべて言う俺、口から血が出てるのがワイルドだな

ぁとか思いながら同時に腹痛いなぁとか思ったりして撃たれた腹部を抑えていた。
「聞くと思うか？」
勝ち誇ったように両手を肩の上に持って行くお馴染みの馬鹿にしたようなジェスチャーを取っている。
だが次の瞬間にまた俺の体の一部を撃つ、今度は肩だ。
馬鹿が、直ぐにその表情崩れさせてやるよ。
「これをよぉおくその無い目を張って見るんだな」
そう俺はあるスイッチをもっていた。
「勿論起爆スイッチだ、実は俺はちょっとした趣味でな起爆剤を世界各地の至るところに仕掛けて旅をしていたんだ。勿論その全てが無線のご都合主義によってこのスイッチ一つで全て起爆出来る、因みに一つ一つの威力は半径５０ｍが消し飛ぶ程だぜ、面白いだろ？」
松下は何かを悟った様に俺の言うことを信じきって。
「やめておけよそんな馬鹿な事は」
と何故かなだめだした。
「知らねぇよ、因みに俺がこの爆弾を仕掛けた数は５３万です」
最後はにこやかに終わらせようと思いちょっとしたギャグ（実際ギャグでも無いが）を言い次の瞬間にはスイッチを押す。
「なっやめ」
呆気なくポチっと巫山戯たような音と共に世界は大爆発を起こした。

って思うでしょ？
爆発したのは俺の目の前にいた松下の真下だけであった、ということで俺は今回もテロリストの手から生き延びたのだった。
「嘘をついてはいけないのか？」
腹に仕込んでいた血糊袋を取り敢えずそのへんに捨てて、結構爆笑しながら俺は独り言を言った。

えんど

0.5

「「「「「「こ　れ　は　酷　い」」」」」」
今どうやら私は拷問を受けているようです。
体罰だ。そうだこれは体罰というものだ。
・・・もういいだろ反省してっから早くノート返せよ。
「まぁいいがまたこういうのノートに書いてくれよ。授業のモチベーションが上がるかもしれないからさ」
畜生、ニヤニヤしやがって。
次はばれない用に書こうと反省の色もなく短く決意する。
じゃそろそろ授業の続きするぞー、と松下はまた黒板に数字の羅列を書き始める。
「それにしてもまさかお前にあんな妄想僻があったなんて驚きだよ。しかも割と表現とか頑張ってて俺思わず微笑ましくなっちゃったぜ（笑）」
暇な授業中次はどんな話を書こう、と悩んでいると隣のホモが巫山戯た事をいい顔を異様に近づけて話しかけて来やがった。
あまりそれには触れないでくれミスターホモ、ついでに顔をもっと離してくれミスターホモ、そして死ねミスターホモ。
「悪い悪い、これはいい歴史になりそうだな。いやそれとあんまりホモホモ呼ぶなよ全く」
ちょっとした悪態をつきながらまた顔を近づけてくる、気にしない方向で行くことになった。
そのようだな、もうこれはネタにもできないからスルーの方向で行く。

わかってるだろうけど状況説明を一応しようと思う。
担任の松下が俺が暇だった為授業中に書いた「やべｗｗｗｗテロリストが学校来たｗｗｗｗｗ」を朗読し始めた。

終わり。
確かに俺も悪かった、だがそこまでする必要があるのか？
俺達はもう高校の二年だ（因みに季節は夏）、全くこの位のことならちょっと注意すりゃ俺だって反省してばれないように周りをよく見て慎重に書くであろうに。
全く以て非効率的だ。
とかちょっと冗談を交えながら阿呆なこと考えてたらまた新しい登場人物が話しかけてきた。
「佐藤、（キリッを忘れてるよ」
なんだ、また俺声に出てたか。
「佐藤はほんとにひとり言が多くて気持ち悪いよね」
お前はなかなか傷つくことを言うんだな。
普通の友人Y君です、別にむかつくから名前を隠してるわけじゃありません、これはフラグです。
そしてあっさり名前がでましたね俺の名前が。
佐藤です。
下の名前は敢えて言いません、フラグです。
「またひとり言か■■」
おぃいいいい友人のYてめぇえ折角名前出さなかったのに！！今のは伏字にしとくからな！
「う、うん。・・・どうしたの？」
別になんでもないさ、はっはっは。
無視されてしまった。
きっとなにか危ない物を感じて距離をとったであろう彼は優秀だ。
そんな優秀な彼の名前は八代光希（ヤシロミツキ）という名前でこの人生を歩んでいる人間である。
基本思ってること全て口に出る俺と仲良く？してくれている数少ない俺の友人だ。
万能タイプ。
ついでにさっきのホモも紹介しよう。名前は一応ある川上という。

だが、何故か知らないが話しかけてくる時は基本的に顔を１０ｃｍ未満の距離で近づけてくるからホモというあだ名になった（というか名前が普通過ぎて渾名の方が板についてる）。
だが実は川上ことホモは女子にも偶に話しかけるのである。そして彼はイケメンである（基本的に俺の知り合いにはイケメンしかいない、ラッキー）。つまり彼はよく女の子に告白されるという。しかし全て断るという。
やっぱりホモなのか、と皆納得をした。
ホモタイプ。
そんな事を考えていたらもう後五分で授業は終わる時間のようだ。
よし寝よう。
「・・・ほんと佐藤君って勿体ないよね」
「・・・ねーイケメンなのにいつもぶつぶつ言って気味悪いからねぇ」
くっ・・・うるさい糞ビッチ共が！聞こえてるぞ！！
もういい寝るっ。
「おーい後五分なんだから少し位頑張れー。後お前今のも独り言に出てて女子みんなお前のことにらんでるぞーざまーみろー」
こっちみんな。
「お前はもう少し女子に対する認識を改めろ」
「松下、珍しくまともな事言うじゃん！」
「黙ってろビッチ」
だが俺も同感し普通にまともなことを言ったことに驚いた顔をしていると。
「なんだお前もビッチか」
残念俺は男だ、ビッチという意味をしってるか？尻軽女とかそういう意味だ。言っとくけど俺はホモじゃないからな。
「黙れこの」
キーンコーンカーンコーン
「はーいじゃチャイム鳴ったので終わりにしまーす」

「起立、礼」
奴は最後に何を言おうとしたんだろう、怖くて今日も寝れないな。
それより今何時間目だろうか、とふと時計を見る。
あぁ、
「五限目だ」
今ので六限が終わったところか。
いや待て何故今貴様は嘘を吐いた？
「？嘘を言っちゃいけないのか？」
悪い忘れてた、そういえばお前はそんな奴だったな
「いやなにを言ってるんだ俺は今日はイメチェンをしてきているんだぞ」
どこらへんがイメチェンなんだ？
「まだ嘘を吐いてないだろ？」
なんだと・・・？
ちょっと焦ってもう一度学校特有のシンプルな時計を見る。
時計の針は長い方が5を刺しており短い方が3を刺していた、つまりしっかりもうすぐ下校の時間だった。
「ひっかかりやす過ぎワロタ」
はっはっは、トイレいこーっと。
忘れてたが一応彼の名前を出して置くと、他称キチガイの数少ない俺の友人の佐久間だ。

これで帰りのショートホームルームを終わりにしまーす起立ー礼ー、という恒例のやりとりがされてから三時間後。
偶に友人の家に行くが今日はいつも通り俺は家でゲームをしていた。
因みに今嵌ってるのはスーファミの聖〇伝説3である。
うへぇこれ小学生位の頃にやんなくてよかった、トラウマになる。
軽く説明すると大体のステージのボスがグロイまたはホラーなのである。
だがこの年ならいいエンターティメントだ、他のシリーズもそのう

ち買おうとかそんな事を考えてたらふと思った、本を読もう。
思い立ったら吉日、直ぐにｍｙバイクで本屋に行った。
なにやらいっぱい本があるなぁどれから読めばいいのやら。
ん・・・？へぇー、これって本の方が原作だったのかアニメはすっごい好きだったがしらんかったなー。
お、これもか、あれこれも？いっぱいあるんだなー。
よし金ならバイトのおかげでいくらでもある。知ってるのは全部買うか。
とか割と気持ち悪いレベルで本屋で独り言を言いながらその日は化〇語に生徒〇の一存に涼宮ハ〇ヒの憂鬱というまぁまぁ有名どころを買った（全巻）。
よーし帰ったらすぐ読むぞー。
「うわなんだあいつ気狂いか？すごい独り言」
「なんか怖いから警察呼ぶ？」
さっさと帰ろう、警察を呼ばれる前に。
そう思いそそくさとバイクにまたがり、
ひっどいなーもうちょっと独り言が多いだけで気狂いだなんて！
これだから金髪ＤＱＮにビッチは嫌いなんだよなー、全員死滅しろ！
心地良い風に吹かれながら盛大に一人で愚痴をもらしていた。
ほどなくして帰宅。

なにこれ面白い。
一ヶ月後ある男子高校生の無駄に広く特に趣味もなく殺風景だった部屋がラノベだとか難しい専門書だとか色々とジャンルの入り交じった本棚に埋もれていた。
こんなおもしろいものがあったなんて・・・本という物に全く興味がなかった頃の自分を殴りたいぜ。
ふむ、一応知ってる本屋の本は全部買ったし読んだしどうしよう。
いやーでも結構多かったな、この俺が一ヶ月寝ないで（一応飯は食った）ずーっと集中するなんて相当すごい量だったんだな。

取り敢えずネット世界に行ってみるか。
小説　読むでggってみるｋｓ。
「小説を読もう！」だと・・・？
以下略
次の日。
なんか書いてみようかなぁ、とか漠然に思いながらも胸の内は熱い思いでいっぱいの少年がそこにいた。

1（前書き）

ちょっとノリで地震も加えてしまった
まぁどうでもいい話だ

1

やべぇ、学校行かなきゃ。
俺が欠席数でもう進級が危うい高校生みたいなことを呟いたのは、本を読み続けて一ヶ月した後に何か書こうと決意の様なものをした２秒後だった。
つまり前の話の直後。
てか今頃気づいたがうん。地震が起こったみたいだ、結構大きめの。
それと異様に頭が痛いし体が動かん気がする＆ａｍｐ；眩暈。
カロリーメ〇トしか食ってなかったからか。
まぁどうでもいい話だ。
地震の処理をせねば。
なんかもうリビングとかに行って思ったがこれは酷いな。
大体の家具が倒れてる。が、ふむどうやらこれでも震源地はもうちょい遠くだったみたいだ。
因みに私の住まいは日本海側の東北地方です。
だが親の心配は仕事の都合で海外だから必要ないし、まぁ問題ないか。
寧ろ俺が心配される側か、いやだがあの親のことだから私達の息子がそんな柔な事で死ぬはずがないとかふざけ切ったことを言って心配はしてないんだろうなー。
取り敢えず割れてるガラスとか処理しなきゃ。

やべぇ、学校行かなきゃ。
そんな以下略なことを思ったのは部屋の掃除という名のガラス処理だとか家具の処理が思ったより時間が掛かって時計の短い針が八を指している時だった。
まぁ明日行きゃいいんだが。

そんなことより久しぶり晩飯作るかな。一ヶ月ぶりに水分ある食事が喰えるな。

頂きます。
テレビを見ながらあったかそうに湯気を立てる米と味噌汁とおかずと新鮮味が見られるサラダ（つまりは今晩の飯）に向かって何かの儀式をするように手を合わせてそう言った。
手作りではないのだが。
なんてたってうちには今机とちっちゃい椅子と俺の部屋の本棚以外の家具はないのだから、適当に買ってきて無事な皿に並べただけだ。
それにしてもなんだなんだ、ニュースばっかりだな。
つまらんなーバラエティやらんのかとか結構被災者な筈だがちょっと不謹慎なことを考えてたら、
「地震が来ます地震が来ます」
とテレビから機械めいた声が聞こえた（というか普通に機械音声なんだが）。それを境にアナウンサーの人が慌てた様に注意を促しはじめてた。
・・・って東北地方やないか。
大変なんだなー。
ちょっと揺れてる様だが今の俺の家には家具など存在しないので・・・いやテレビがあった。
ちょっと焦ったが、いやそうだテレビにはなんか底にシールみたいなのを貼ってあるから唯一壊れなかったんだ。
つまりは焦る必要もなく飯を喰い初めてた。
因みに机はすっごいミニな物を使ってるから問題無し。
震度６辺りだろうなー。
飯も食い終わったしさっさと明日の学校の準備を始めないと、とか初々しいことをしたら直ぐ寝床に着いた。

次の日。
コケッコッコーとかゼルダの〇説っぽい擬音が聞こえてきそうな程晴れ渡る空の今日。
俺は寝坊した。
ふっ。焦ることはない俺様はもう一ヶ月も無断欠席をしているのだぞ？今更遅刻の一つや二つ遅刻など（笑）みたいなものだ。
「なに朝から阿呆な事言ってんのよ早く学校行くわよ」
（　。Д。）
（。Д。）
（。Д。）
その時俺はこんな顔をしていたと思う。
なぜならその少女は。

2

何故なら。
なぜなら。
ナゼナラ。
その少女は、
「いやなにちょっと西尾っぽいシリアスな雰囲気の書き方してんのよ。只の幼馴染でしょ」
俺の恐るべき幼馴染なのである。
久しぶりな気がするな我が宿敵。
「そうね一ヶ月ぶり位かしら。全くの音信不通でちょっと心配したわよ」
平然とした顔で嘘を吐くという嫌な詐欺師（詐欺師は大体は嫌な奴だが）みたいな事をやってのける奴が幼馴染である。
「可愛いんだからいいでしょ？ほら幼馴染っていうヲタク男子が誰もが羨む位置関係の娘が目の前にいるのよ。もっと喜びなさいよ」
君はとても面白い冗談を言うんだな。はっはっは。すまない思わず笑ってしまったよ。
いやそんなことよりだ、何故俺がオタク男子だと思った。
「いやこの部屋この部屋」
といって俺の部屋の全方位というか主に本棚に目を配らせた。
「なによこれ、一ヶ月も篭ってこんなの読んでたの？」
馬鹿め貴様はこういった本の素晴らしさを全く分かってないようだな。
きっと近い未来そういっていた自分が憎らしくて殴りたくなってくるぞ。
いや違う、なにもオタクな本だけじゃないだろう良くみろ。ほらこれとか結構有名な論文だぞ。
そう言いながら本棚の奥の方からなにか自分でもよーく考えたら意

味がわからない様なタイトルの本を取り出す。
「・・・取り敢えず学校行きましょうか」
どうしたのだ、なにか苦虫でも噛み潰したような顔して。
学生なのだからこういうのも読むといい。
「早く準備しなさい」
そうしよう。
だが今日は俺が優勢な様だな。
いつもは君が凄く嫌な奴に見えたが今はゴミ屑に見えるぞ。
「もしかしてキャラ変わったかしら」
冗談だ。

登校中、歩きである。
ここで私が通う学舎について少し説明しよう。
普　通　の　学　校　で　あ　る。
それはそうと我が幼馴染よ、近況報告頼む。
「名前を呼びなさいこのゴミムシが」
それはそうと渚よ、近況報告
「私の名前を呼びなさいと言ったのよ」
？
あ、悪い悪い普通に名前間違えた。
いやそんなことよりＣＬＡＮＮＡＤは神だよな、あれは泣いた。
「近況報告ー学校でちょっとした事件が起こりましたー。その犯人に貴方が疑われてますー」
へーちょっとした事件ってことはなんか無くなったとかか？
「えぇ亡くなったわよ」
そっちのか！！そっちの亡くなったか！
ってかちょっとじゃないじゃん！それに疑われるって結構あれじゃん！！
「嘘です」

あれデジャブが・・・
そういえば学校に詐欺師もう一人位いなかったっけ？
「いやそれ私の兄だから」
はー道理で似てるわけだー、・・・いや騙されないぞ。
なんでお前と幼馴染なのに奴とは只の友人止まりなんだ。
「はっはっはー赤の他人でしたー」
本題に戻ろう。
「そんな彼が何者かに殺されましたー」
はぁーまぁあいつ嘘ばっかり吐くからなー、しょうがねぇんじゃねぇの？
「いつの間にイケメンな幼馴染がＤＱＮになってて私とても悲しいです」
全くそろそろ本当の事を言いなさい、もうそろそろ学校着くんだから。
「では本当の事を言います」

「貴方は学校で自殺しました」
ふむ学校に着いた様だ。

3

どうやら俺は自殺した様だ。
あれ？なんか体が軽いよ？
もう行かなくちゃいけないみたいだね・・・
じゃーな我が幼馴染よ。
「嘘
やっぱり嘘か。危うく自分でも無いのに昇天しちまう所だったじゃねぇか。
じゃないけどね」
そうか、じゃ学校入るわけには行かなくなってしまうわけだ。
「あら？昇天しないの？」
さっきのはネタだ馬鹿野郎、ちゃんと体もあるんだしな全く問題ない。
「その割にはちょっと浮いてたけど・・・」
まぁそんなことはどうでもいい話だ。
俺が推理するにだな、それは俺以外の奴が死んでるだろう。
只動機が全く掴めないな。只の嫌がらせか？
「嫌がらせで自らの命を犠牲にする人なんて、素敵な根性持ってるわね」
全くだ。
とかまぁ結構冗談も交えながら校門の前で坦々と会話してるという、今の時間帯にはいないのだがもしいるのならばちょっと通行人に迷惑なことをしていると案の定声が掛かる。
「おーいそこで何をしてんだーもう授業始まってんぞ」
国語のゴリマツ・・・！
「いやそのネタちょっと伝わりにくいから、実際私もうろ覚えだか

ら」
「ギャグマンガ日和新刊なかなか出ないよな」
ほら魂の共鳴をしていればこんなコミュニケーションなんて余裕で取れるのさ。
「てかお前・・・佐藤じゃないか？」
あっやべ。
「彼は今は亡き彼の従兄弟の石江君です。生前彼とは凄く容姿が似通ってる所から結構仲が良くて彼が自殺されたと聞いてその現場を確かめたくて来たそうです」
流石渚、頭脳系。だが石江って誰だよ。
「そうか・・・なら悔いが残らない様にちゃんと見ていってくれ石江君。校長には俺がいっとくから」
はい・・・ありがとうございます・・・（泣
俺も必死に一芝居打ってみる、が。
くそう隣の野郎は必死に笑いを堪えてやがる。
まぁどうでもいい話だ。
教師からの許可も降りたし（実はこいつ担任の松下）、さっさと現場みに行きますかー。
「というかこういう土壇場の時は思ってる事口に出さないのね」
実は独り言を言うのってキャラ作りの為だったんだ。
スタスタスタと二人は綺麗な姿勢を保ちながら飄々とした態度を以て現場に向かっていった。

この時偶然遅刻して隠れながら話を聞いていた第三者である川上（ホモ）は思ったのであった。
（いや絶対嘘だろあれ！だって最初の頃の会話ギャグマンガ日和とか言ってたじゃん！！あれギャグマンガだよ！？なんで彼の死を悲しんでる従兄弟からそんな言葉が出てくるんだよ！騙される松下も松下だけどな！あとその後の台詞聞いちゃったよ！佐藤のあれってキャラ作りだったのかよ！！！ちょっとショックだよ！というか二

人の歩き姿無駄にかっこいいなおい！！）
と。
一人変な流れで真相を知ってしまったホモ（川上）は息を荒げて必死にツッコミを出していた。
「まぁいいやもう・・・教室に行こう」

ここか、血の痕が結構生々しいな。
場所は簡単に言うんなら人気の無さそうな校舎裏、まぁ適当に想像してくれ。
まぁ血なんて輸血パック使えばいくらでもごまかせるけどな。
死んだのはいつだい？出来るだけ詳しく。
「実は私もあんまり知らないのよね聞いた限りだと今から一週間前早朝五時辺りにこの辺を通ったら血溜りができててそれに校長が気づいたわけで、つまり第一発見者は校長らしいんだけど」
もうまるっきり掴めないね。
謎がいっぱいだどっから解いていきゃいいのか・・・
「というかなんで一ヶ月も休んでたのよ・・・まるっきり意味わからないわ」
・・・あぁここでまた一つ謎が生まれたようだ。
「どうぞどうぞ」
なんでこの学校の奴らは俺が学校来てないのに少しも疑わなかったんだよ。
寧ろなんで俺が態々学校で死ななきゃいけないんだよ。
「確かにそうね気づいたらみんな受け入れてたわ」
はぁー自殺ってそんなもんかねー。
「というか貴方この前まではもっと普通のキャラだったからじゃない」
影が薄いとでも言いたいのかこの尼。

いやうん事実だ、事実ならばしょうがない。
「影の薄いキャラは基本的に一週間で忘れられるわ。まぁその事象は結構記憶に残るもんだけどね」
つまりはなんか自殺事件起こったけど死んだのだれだっけみたいな？
「その通り、それに一応血液からＤＮＡだとかなんとか調べたらしいしね。疑う必要もなかったんじゃない」
渚はしゃがみこんで俺（仮）の血の痕をなぞるように指を滑らせる。
はぁーん、じゃまぁそこはスルーといこうか。
さて一番の謎だが、なんで俺に完璧に変装といか変形だとか、まだわからない方法だが俺のＤＮＡと同じ血液使ったりとそこまでして俺が死んだという事実を伝えたかったかだ。
「まだ人間に知覚されていない技術が関係してたりしててね」
立ち上がりおどけたように古泉君のあの動作又はドンキーコングのあの動作を目を細めながらする。
あのポーズは実際相当寒い。
因みに俺は腕を組んだままの壁に寄っかかるというピッコロさんっぽいポーズを維持している。
まぁどうでもいい話だ。
やっぱりそれ以外で考えるとしたら意味のわからない嫌がらせとしか考えられないな。
「まぁその技術云々はほっといてこういう考えはどうかしら？」
なんだいってみろ。
「誰かが貴方の命を完璧に無くす用に狙ってるこの人をＡさんとしましょう。そして何がなんでも死んで欲しくないＢさんがいます。」
人差し指だけを空へ突き出して何かを提案するように続ける。
ふむふむ。
「ＢさんがＡさんに君が殺されない様にするにはどうすればいいと思う？簡単な方法じゃ絶対無理だとして、例えば警察に頼って話がもし通じたとして警察の全機能を持ってしても絶対に殺されるとしても」

日本の有力な国家的機関を敵に回しても殺されるか。
あぁなるほどなるほどね。
「そうBさんはこう考えるでしょうね。君を死んだことにしてその後どうにか偽装すれば貴方の命は結果的に守られる」
なんかターミネーターみてぇだな。
「ターミネーター？」
なんかあのロボットもめっちゃ頑張って守ってなかったけか、未来で活躍するであろう主人公を。
でもあの物語じゃ未来で死んだかどうかわかるから今回話した作戦はとらなかったようだな。
「なるほどね、確かにちょっと似てるわね。実際未来のロボットなんて来てもそんな簡単に死なないでしょうけど」
未来からのロボットならあの青たぬきの方が好みだな。便利だし。
ちょっと話がそれたな。
というかその話だと偽装される筈の俺がまだ偽装らしきことされてないんだけど。
「いやそれはわからないわね。もしかしたらもうなんらかの方法で偽装されてるかも」
それも可笑しな話だ。本人に全くコミュニケーション取らないで意図的にAさんから隠すのは無理じゃないか？
「まぁそれもなんらかの理由があるんでしょうね。もしくはBさんが何らかの妨害で偽装出来てないとか」
ぞっとするようなことを言うんだな。
少し背筋に悪寒が走った様な気がしたからここにきて姿勢を変える。
ジョジョ立ちをしてみた。
詳しく言うなら、左手はパーにして掌を顔側に向ける様にして小指と薬指の先端辺りを口元に持ってくるようにする。右手もパーにして腕は伸ばしてやや下を向ける下斜め４５。くらいにして掌は後ろ側を向ける。ポイントは体を上手く曲げることだ。詳しくは「ジョジョ立ち」で検索。

「・・・話を続けるわよ」
引かれた気がした。
だがこのポーズは続けるぞ俺は。
まぁその話がもしあってるんだったら俺はそろそろ死ぬことになるな。
「まぁ悪魔で仮説よ。もしもの話だわ」
でも他にこの話の解釈のしようあるか？
「只の悪戯」
としてはありえないんだよ。
「全く謎が多い事件ね。魔術師とか関わってるんじゃないかしら？」
あったらいいねそういう展開。でもそういうのって基本的に俺に特殊能力あるんだけどなー。
すこし脱線したな、気を取り直して行こうか。
校長に聞き込みしてくるか。
「そうね頭ばかり使っていてもあれだしね」
そういって伸びのような事をし歩きだす。
それを合図にしたかの様におれもジョジョ立ちを解いて、歩きだす。
正確には歩きだそうとした。

今俺は殺された。
だが体は普通だ、特に問題は見当たらない。
渚の方も特に問題はないようだ。
「ねぇなんか今殺されなかった・・・？」
そうでもないようだった。
わかんないことがあってちょっとした事を先生に聞くようなそんな感じで尋ねられた。
まぁいいや、特に問題ないみたいだし予定通り校長の所へ行こう、
この死んだ感覚は歩きながら話そう。
あぁ問題と言えば何故か渚がちょっとくっついて歩く用になったということぐらいなんだが。

俺そんないちゃいちゃしてる場合だろうか・・・？

4（前書き）

久しぶりだな貴様ら

4

今現在、俺達は校長室に向かって移動中である。
一応変装らしきことはしている。髪の毛をワックスでオールバック。
ちょっと渚に笑われた、いやちょっとというか爆笑だった。
まぁいい。
さてなんなんだろうかさっきの感覚は。
「例えるとしたら、」
殺された以外に思いつかないな。
「じゃあどう殺されたと思う？」
わかんね。
「そうね同意見だわ、問題はそれで外部又は内部からの影響はあるかないかになってくるんだけど」
といって渚は軽く周りを見渡しと自分の体をちらみしする。
なさそうだな。
因みに今は休み時間中の様なので普通に生徒と合うが、変わった対応は取られていない。
偶に話しかけられるし姿が見えないとかの外部からの影響もなさそうだ。
「まぁ外部からはね。内部はまだ確定はできないわね」
え？何故だ？
「ファンタスティックに、オカルティックに言うなら、もしかしたらさっきの感覚で不思議な能力が使えるようになったとか」
ねぇよ。
と自分で即否定して思ったが、もしかしたらそんな非現実的な事もあるかもしれない。
渚も俺と同じように俺を否定する。
「１００％無いとは言えないわね。大体今回は普通の理論では説明できないことがいっぱいじゃない」

まぁ確かにな、明らかにおかしい点がいくつもある。
「例を上げるならまず動機からしておかしいわね」
それにDNAだとかな、いやそれは鑑定する医者がどうにかすればいけるか。
まぁそれは保留にしておこう。
もしなにか能力的な物が芽生えたのだとすればそんな面白いことは後にとっておいた方がいい。
「メインディッシュは最後にって？私は最初に一番好きなものを食べる派なのよ」
まぁ結果的にこの話は後ってことになったわけだが。
「そうね第一発見者の校長さんにお伺いしましょうか」
・・・因みにメインディッシュは最後ではない、最後は確かデザートとかだった筈だ。
まだまだだな。
「失礼します」
そう凛として響くような声で入室していった、一応俺も失礼しますと適当に言い入っていった。

ここで新しく出てきた登場人物のご紹介である。
小振なナイフを一本を校長の心臓に当たる位置に突き刺している。
ミスターXさんでーす。

そう校長はXさんに殺されていた。
え、これどうしようとかそんな思いを目に乗せつつ渚の方を見た。
渚の方はこっちみんなといいた気な視線をこちらに向けていた。
（どうしよう）
（私に聞かないで）

（選択肢は二つ。逃げるｏｒ戦うあと道具と仲間）
（一つの間違いじゃない？）
（俺もそんな気がする）
そんな幼馴染とのアイコンタクトの末に出た結論は、
「勿論逃走」
勿論逃走。

同時に踵を返し校長室から出る。
ここまでの間一秒弱。
そこからはとりあえず外に向いダッシュする。
「メインディッシュとやらの使いどころじゃない！？」
こういう土壇場で能力使える奴なんてアニメと漫画とラノベの主人公及びその登場人物だけだっ！
「やっぱりさっき確かめといた方がよかったんじゃない！」
起きてしまったことをうじうじ言うとは渚らしくないじゃないか！
「五月蝿いわね！声発してる暇があるならもっと早く走りなさいよ！」
言われんでもわかってる！
そんな軽口を叩きながら逃走し続けてやっと出口の前まで来た所で、
「しかしまわりこまれてしまった！」
ここで選択肢はまた四つに別れるわけだが、戦うｏｒ道具ｏｒ仲間ｏｒ逃げるｏｒその他！どれにするよ！
「全部！！」
渚は道具の持っているカバンをＸに投げつけた！
Ｘはひらりと身をかわした！
渚と佐藤は逃げた！
しかしまわりこまれてしまった！
渚は仲間の佐藤をＸに向け投げ飛ばした！
佐藤の捨て身斬り！
Ｘはひらりと身をかわした！

佐藤　に　５００００　の　ダメージ　！
佐藤　は　死んだ
渚　は　その他　を発動した　！
Ｘ　に　１００００００　のダメージ！
Ｘ　は　気絶　した　！

いやおかしいから。いやおかしいから。
「どうやら戦闘が終わったから生き返った様ね」
いやそのシステムＦＦだけだから！ドラクエだと棺桶状態だから！
「なんかシリアス展開に持っていけないわね・・・」
そ、そうだな。無理矢理シリアス展開に持って行くとしたらだが。
その他ってなにをしたんだｙｏ・・・
「魔術よ」
なるほど。
どうやら渚はアニメ、漫画、ラノベの主人公および登場人物に属するタイプの人間なようだ。

5（前書き）

今日は気分が乗るしもいっこ出すぜ！

5

「なんかね実は殺されたって感覚からなんかすっごい不思議な力の波的な何かがすっごい体の中を巡ってるのよね」
ほうほう、続けろ続けろ。
「その力みたいなのを実は移動中にまぁ色々試して見てたのね」
あぁいいぞ続けろ。
「それでまぁ校長室に着く頃には大体自分の能力というか力を理解してたのね、それでわかった力がね・・・」
焦らすな焦らすな、番組構成的にはグッドだが。
「光をいろんなエネルギーに変換できるみたいなのよね」
なんかあれだな、あのー中二な・・・
「全くその通りなわけなんだけど中二な能力程強いのよ。例えばほらアクセロリータさんとか」
まぁ同意だな。
それに光なんてその辺に溢れ返ってるもんな、応用性抜群なわけだ。
「そういうこと、逆に光がない空間なんてこの世界には存在しないんじゃないかしら」
んでどうここに転がっているXさんを倒したんだ？
「そうね光っていうのは常に何かに反射してるのはしってる筈よね？その反射してる光を重さっていうエネルギーに変換させて、まぁ簡単に言わせれば衝撃波みたいなものね。それで気絶させたわけ」
うん、よくわからん。
つまりはあれだろ？重さのあるものをあいつに光の速さで上から落としたって事だろ。
「そういうことね」
あれ？光の速さでってことは・・・
なんであいつ生きてんの？
そういって俺は床に横たわっているなにも拘束されてないように見

えるそいつを指さす（さっきの容量で常に光を変換して圧力にして動けないようにしているらしい）。
「いやぁー私もあれでもうぐちゃぐちゃというかぺっちゃんこね、になると思ってたんだけどね。彼はどうやら頑丈の様で」
すっごいな。いやすっごいな。
光の速さってどんくらいか知ってるのか、秒速三十万ｋｍだぞ？星すら壊れるレベルだぞ。
ちょっと一回「お前のうんこで地球がやばい」でぐぐってみろよ。
「やっぱりオカルト的なのが混ざってるようね、なんか防壁的なのをしてたんじゃない」
さっすが魔術、光の速さも諸共しない。
ってかお前のって魔術じゃなくね？異能じゃね？寧ろ人外じゃね？
「そんなもの便利だからいいのよ。問題はこれからどうするかよ」
そういって周りに目配せする、つられて俺も周りを見渡す。
無人の教室、人気のない廊下、音の無い学校。
「なんでやねん」
なんでやねん。
「それは私が人払いの魔法したからですよ」
男の透き通るような綺麗といってはあれだがもの凄く綺麗な声が音のない学校の玄関に響いた。
男だったんだ。
なんか全身黒いコートで隠してた&ｐ；白と黒が使われている不思議な仮面があったからわかんなかったぜ。
「なんで圧力かけてんのに口動かせんの？」
「なんででしょうね」
挑発するようにニヤリと笑う。
ってかあれ？仮面いつの間になくなってる。出た、俺の知る男大抵イケメン説。
「まぁいいわ、もうちょっと落ち着くところで詳しく聞き出しましょう」

おk、超展開だがおk。
「そんな予定通りに進むわけがないじゃないですか」
「なっ・・・！」
おぉなんか少しずつ彼の体の輪郭が薄れていくぞ。
お前・・・消えるのか？
てか俺こんな蚊帳の外で大丈夫か？
「少しだけ情報を与えておきますね、私は貴方達の味方に属する人間です。後さっき貴方達が外で話してたじゃないですか、あの推論殆どその通りですよ、それで私は言わばさっきの話のBです。あぁあとそこの君ももう能力みたいなのありますよ。まぁ他にも言いたい事があるんですけど、時間がないんで失礼します。また合いましょう」
そう言って消えていった。

・・・早口だったな。
「すごい早口ね」

6

・・・とりあえず家に帰ろう。
「・・・そうしましょう」

（どうしてこなた！どうしてこなた！！）
そこには何故か今の光景を静かにうるさく見ている人影があった。
（ちょっと忘れ物したから取りに来たらこんな不思議な光景だよ！俺そんなありきたりな理由で魔術だとかそういうすっごいのを見ちゃって良かったのかよ！）
皆さんご存知の川上（ホモ）君である。
一応三回目の登場で少しずつ親しみが出てきたであろう。
（ってかそんなすごい存在だったら俺が今こうして見てた事も知ってたろ！なんで俺消されないんだ！？いやこれはもしかしてあれか？もしかしてあれなのか！？）

（・・・キターーーーーーー！！！！！１１１１すっげえぇぇぇぇぇぇなｎ以下略）

そんなことは露も知らず。
俺と渚は放心状態のような感じでぼーっとしながらとりあえずうちに帰った（家具のない殺風景な俺んちへ）。

そして帰宅。
玄関ゾーンに入りちょっとだけ見慣れている風景に戻った瞬間、
なんでやねんっ！！

「なんでやねん」
元の状態に戻った。
大体なんなんだよあの美形！明らかにラスボスっぽい感じの雰囲気を醸し出してるのに味方かよ！！
つかなんだよ味方とか意味わかんねぇよ！俺達は何と戦ってるんだよ！
「・・・オカルト的ななにかでしょうね」
もう！！世紀末オ〇ルト学院乙！
「とりあえず状況整理しましょうか」
お、おぉ流石我が幼馴染こんな時にも冷静頓着、いや流石。
取り敢えずリビングまでついて来たまへ。

もういるッ！
光の応用流石！
「まぁ座りなさい」
椅子一個しかないのに何言ってんだｙｏ！！
さっさとどけばか！
「だが断る」
まぁいいや、うんいいや。
しょうがないと、適当に諦め我が幼馴染にひれ伏す様に地べたに座る。
畳ではないけどそんなに堅いものではない。

さて本題。
「そうね、これからどうするか。よね」
普通に過ごす。
異議のある者は手を挙げなさい。
「異議あり！！」
ビシッって聞こえてきそうなほど素早く指をさされた。
・・・どうぞ、次からはちゃんと手あげて下さいねー。

「やってみたかっただけよ」
おふざけがすぎますよ、ザーボンさん。
「私ドドリア派なの」
どっちでもいいんだよ！！
で、異議はあんのか！？
「無いって言ったじゃない」
じゃあ今日は解散！終わりばいばーい！！
又来週も見てくださいねー！！
ジャンケンポン！！（フレミング右手の法則）
はっはっはっは！！私の勝ちだひれ伏せ愚民ども！
はっはっはっはっは！！！

7

どうやら変なことを一人で叫んでしまってたようだやっぱり色々あって疲れてるんだな。
どうでもいいことだが今はもう髪型オールバックではない。
さっきあぁ言って風呂に行って三十分のんびりしてたらこのざまだよ。
「話を続けましょうか」
高圧的な感じで話しかけてくる。
シリアスモードですか。
少し戯けながら返す、俺の体制は正座だった。
「真面目な話をしましょう」
おうけい、そしてごめんなさい。
で、どうするよ。
「やっぱり私達にはどうすることもできないんじゃないかしら」
その通りだと俺も思う。
つまりはさっき言った通り流れに身を任せると？
「それはその通りなんだけど任せ方もあるでしょう」
ほぅ。
「具体的に言うと、情報が欲しいわけよ」
つまりは次に情報を得るような機会があったら意地でも取りにいきゃなきゃってことか。
「その通りよ。そしてその機会があるのは、」
ここで俺がベストタイミングで口を挟む。
またあいつと会ったときだな。
「その通り、なんだか映画のワンシーンみたいね」
俺も思ったぜ。
だがそれが何時になるかだなー・・・。
全く検討がつかない。

「そうね・・・少し予想がつくとしたら、また次なんらかの問題が起こるときが妥当でしょうね」
いっつべりーあばうと・・・。
だがそれが妥当の様だなー。
「気を張っていきましょうか」
そうだな。
解散でおk？
「お風呂借りてくわね」
・・・まぁいいだろう。

そして
のんびり。
してると必ずと言っていいほどトラブルはやってくる。
今回もそうですた。
（ピンポーン）
そのトラブルはそんな間抜けな音と共に来た気がした。
あぁ・・・んだよもう折角の俺ののんびりタイムを・・・。

はいはーい、今出ますよ。
「やぁ久しぶり」
うわ懐かしい。
「二ヶ月ぶり」
いや普通に一ヶ月だから、嘘つかなくていいから。
てか俺死んだんじゃないの？
「いｙ」
あぁーいいやお前に問答を問いかける事が阿呆だということだったな。
「賢くなったなわが息子よ」
いやお前只の詐欺師みたいなクラスメートだから。
おいおいまさかこいつも変な問題に巻き込まれてるんじゃないよな・

・・

とか思いながら、というか祈りながらもそんな願いは既にブレイクされてる訳なんだけど。

兎に角願いながら、詐欺師みたいに嘘ばかり吐くこいつにツッコミを一応食らわすという談笑をしていたら。

こいつは、佐久間は談笑の途中で脈もなくこんな事を言った。

「あぁ佐藤、私はどうやら魔術という物を身につけてしまったようだ」

嘘だといいなぁ、とか思いながら俺はとりあえず頬をかいてた。

7（後書き）

とりあえず最初に名前出したキャラをとりあえず出しておこうと思った

8（前書き）

久しぶりだな貴様らふぅーはははは！！
はい、そうなんですシュタゲにはまってました

8

・・・う、嘘だといいなぁ。
わかってる、わかってるんだ・・・こいつがこの後何を言うかなんて。
「嘘だけど」
ダウトだよ。
「うんノーコメントで、なんか狼少年化してるから今の俺は何言ってもあれな気がする」
ふーんお前にしてはえらく真面目な事言うんだな、ちょっとだけ見直したかもよ。
「まぁ事が事だから」
そういって苦笑した佐久間の顔が異常にかっこよくて惚れそうになったのが印象的だった。
というかいわゆるギャップ萌えだった。
お前いっつもそういう顔してた方がもてるぜ多分。
「こういうのは偶に見せるからいいんだよ、いわゆるフラシーボ効果ってやつだ」
なんか違う気がするが言いたい事はわかった。
要するにだからギャップ萌だろ？
いやてか新鮮だな、なんか今日のお前は。
「混乱してるのかもな」
やはりか。
「まぁでも全部嘘だけどね」
やはりか。
ほんとにお前は・・・ふぁっく。
そういって別れの挨拶を済ませようとしたら、
「あら？佐久間君じゃない」
おい待て。

渚これはどういうことだ。
「なにがよ？」
すごくエロイです。
「ノーコメントで」
そう、つまり渚は風呂上がりな訳で、バスタオルを巻いてるだけなわけで、エロスな訳で。
あれ？ここっておれんちじゃなかったっけ？
「いや私の家だけど」
「は？ここおれんちだろ何言ってんだよお前ら」
なるほど。
つまり渚お前は服を着てこい。
「はい」
佐久間お前は黙れ。
「だが断る」
解散ッ！！
「あ、佐久間君面白い話してたわね。ちょっと詳しく聞かせて貰いたいんだけど」
「嘘をついてもいいんならいくらでも話してやろう」
もうお前ら帰れよ。

忘れてたが渚と佐久間の関係性について話しておこうと思う。
と、言っても特に明記することはない訳なんだけど、端的に言うんなら気あいすぎでしょあんたら。
ってくらい仲のいい奴ら。
両方性格捻じ曲がってるから。
でも恋愛関係には発展しない、いつだったか聞いてみたら二人とも「こんな最低な奴に自分の大事な部分見せれない」と。
つまりどちらも一々気を張らなければいけない訳で、なんだか納得できたけど。

そんな話である。
そしてこんな回想を、もとい現実逃避を続けている今もその気の張り合いをしてる訳で（オレンジ色に光る玉を七つ集めると願い事が叶う物的な気ではない）。
お前達の話はマジでめんどくさい。
「俺もそう思うぞ詩該（しがい）」
「私もそう思うわ佐久間君」
実は渚は本名じゃ無かったのでしたの巻。
渚もとい詩該試（しがいこころみ）が我が美しき幼馴染の本名である。
実は名前なんてどうだっていいのだ、その場のノリで決めてしまうのが殆どである。
今回はちょっと人生というギャルゲに嵌ってちょっと渚って名前をつけてみた。
脱線したが、こいつらがなんの話をしていたかと言うと勿論今俺達が向き合っている大よそ非現実的な魔術的な話だ。
まぁ・・・大体は予想が着くであろうが、以下がさっきのやりとりである。
「どんなことができるの？」
「なんだと思う？」
「知らないわよ早く質問に答えなさい」
「少しは考えろお前は頭いいはずだ」
「考えなくてもあんたに聞けば即解決でしょうが」
「その通り。ではお教えしよう私の戦闘力は５３万です」
「戦闘力なんて聞いてないのよ、早くいいなさい」
「なんだと思う？」
以下似たようなループである。

よし一旦みんなで寝ようか。
「・・・エッチ／／／」
いいんだよお前はそこで変にリアクションしなくて！！

「アッー」
あれお前ってそんなキャラだったっけ！？
そう俺が言いたいのは落ち着け餅つけという事だ。
休息を取ろうということだ、いい提案だろ？
もう夜も遅いし。
「そうなのよね実はもう１２時回ってるのよね」
「気がついたらもうこんな時間かー」←棒読み
お前らの話が長いからだよ！そして俺が呑気に回想に浸ってると同時に卑猥な妄想をしてたからだよ！！
それはちょっとあうあうな妄想だから書いてないけど！
「あ、私そろそろ着替えるわね」
「うむいってこい、目のやり場に困ったぞ全く」

まだバスローブだったのかよッ！！
（ピンポーン）

何故か来客を知らせる何か嫌な予感のするベルと俺のシンプルなツッコミはびっくりするくらい同時だった。
正直眠いのに、一波乱の予感だよ畜生。

8（後書き）

また気が向いたら書きにくるお

９（前書き）

気がむいたから書きに来たおｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
久しぶりだな貴様ら

9

はい、どちら様ですか。
「八代ですけど■■君いますか？」
おいぃいいいだから名前は下の名前は隠してるんだから言うなよ馬鹿！！
インターホンを取り開口一番に俺の名前を呼んできやがったのは最初の方に出てきた一般人、普通の友達、万能タイプである八代である。
ここで俺はなにか本能めいた物を感じて瞬間的に思考する。
彼は俺を訪ねてきたという、これはおかしい。「俺は確か学校で死んだ事になっている」という問いが生まれる。
確かにこれは佐久間にもしたが結局はぐらかされてしまった、だが佐久間ははっきりいって異常なタイプの人間だ。例えば死んだと思っていたクラスメートっぽい奴（髪型オールバックの俺）を何かの拍子に見かけたとしてもそいつらを付けて家に行き問答する、という事は平然とやる。
だが今考えればそういう問答は未だされていない、本当に学校で俺は死んでいるのか？
疑問で渦巻いているなか八代は途端にこう言った。
「惜しいね確かに君は学校で死んだ事になってるけど一部の人間はある事を知って、そしてそのついでに君の事も知っている、みたいな感じだ」
おい、この二ヶ月位の間で考えた事を口に出してしまう癖は直ったと思ってたんだが、もしかして全部声に出てたか？
「続きはＷＥＢで！」
台無しッ！！

取り敢えず八代を家にいれた、今日の夜は長くなりそうだな。
「改めて今度は八代君に聞くけど何を知ってるの？」
渚、もとい詩該試俺（しがいこころみ）の幼馴染は八代にそう聞いた。
いや、それより気になることがある。八代お前は味方か？
「詩該さんの質問は長引きそうだから先に佐藤の質問に答えるよ」

「味方とかワロス（笑）」
やめて、そういうの結構傷つくから、一応俺は切羽詰った状況だから。
「冗談はさておき、一ヶ月位前までは普通に学生やってたのにね、まさかこんな中二病な話に巻き込まれるとは、ほんと人生って何が起こるかわからないもんだね」
「やっぱりそういう話なのね」
八代はちょっと真面目なふいんき（何故か変換できない）になって日本酒の入ったコップが似合いそうな哀愁漂う雰囲気でそう言った。
それに対して試は少しワクワクするように子供が夕方六時からやるようなかっこいいアニメが始まる瞬間、そんな感じの如何にも楽しみという顔でそういった。
試って割とこういうの好きだよな俺はこんなにも平和思想だというのに。
「まだ私たちは子供なんだからこういうのは積極的に楽しんで行かなきゃでしょ」
やっぱり楽しそうに言う、そんな顔は凄くかわいかった。
とちょっと小声で話していると、八代はゴホンと咳払い一つしてこう切り出した。
「実際ね今に限って言うなら味方だよ、でも時と場合によっては殺し合いもありうる」
「そういうことだ」
いやどういうことだよ。

空気状態になっていてちびちびとお茶を飲んでいた佐久間はちょっと声を低くしてそう言ったけど、
「いやどういうことよ」
疑問が残るのは当たり前だ、殺し合い？まさかそこまでとは。
「まぁ今回の俺の役はそれに関する所謂説明役って感じ、遅い時間になって悪いね」
あー、なるほど佐久間は、
「佐久間君は、私たちが変な行動起こさない様にっていう見張り役みたいな物ね」
俺の言おうとしてた台詞をそのまま代弁してくれた、というか試に台詞をパクられた。
「いや違う、断じて違う」
「うん、その通り。普通の人はいきなり異能の力を手に入れたらなにするかわからないしね。まぁ君たちは普通とは言い難いけど念のため佐久間に任せてたってわけだよ」
佐久間が虐められていた、というか佐久間を苛めていた。
ちょっと悔しそうにして顔を赤くする佐久間可愛い。
おいなにを見ている、そんな目で俺を見るな八代。
「いやなんでもないけどね」
「あ、ひょっとして八代君も佐久間君もなんかしらの異能力をもっているの？」
ここで試が話題を変えてくれた、俺が冷ややかな目で見られてるのを思ってだろう流石俺の愛しき幼馴染。
「あぁその通りだ」
「八代君は思考を読む能力とか？」
「惜しいね」
ここで一旦二人の話が途切れる。
知的そうなやりとりをする二人だが多分佐久間と俺は？マークでいっぱいだ。
いや顔に出してるのは俺だけだ、多分佐久間は表面ではクールぶっ

てるけど脳内で激しく混乱が渦巻いているだろうことがすぐわかる。
その疑問というのは何故試に予想が付いたかだ、だがはっきり言って俺は既に予想が付いていた。
最初のやりとりでもそうだしさっきの冷ややかな視線も俺の思考を読んでだろうし、俺でなくても当事者なら直ぐ分かることだ。だが何故試がわかったんだろう、いやこれもちょっと考えれば予想が付くことだ。
「あんたは顔に出やすいのよ」
お前の観察力が異常なんだよ。
他愛もない雑談かの様なノリでそう返す。
そう多分試は自慢の観察力（というか基本的にすごいやつだから自慢というのは語弊がある）で俺の考えている事も読んだのだろう、そして八代の能力に予想をつけたと。
と、そこで佐久間もわかった！みたいな顔をして、
「因みに俺の能力は予想がつくか？聞いて驚け手から無限に唐揚げが出せる能力だ」
いつもの調子に戻っていた、それはさておき。
でも、惜しいって答えたってことはちょっと違うんだろ？どういうことだ？
「完全に教えるわけがないだろ阿呆かよ君たちははちょっとは考えてよ」
「その通りだ、お前らはもしかしたら俺達と殺し合う時がくるかも知れないんだから手の内なんて晒すわけがなかろう」
かなり物騒な事を言っているんだけどなんだか普通で不思議だ。
まぁそれもそうだな、適当に推理でもしとくわ。
俺も普通に返す。
「でもなんで殺し合いみたいな話なの？そろそろ本題に入らない？」
「そうだね、ちょっと長くなるから心して聞いてよ。二度とは言わないと思うから」
ちょっと真面目な声を出してそんな事をいう八代はかなりイケメン

でちょっと惚れそうになった、とか考えてたらまた冷ややかな目された。
次へ続く。

10

「どこから話そうか、そうだねまず君たちが一週間程前に死んだという事件から説明しようか「君たちはあの事件をどう見る？一応捜査してたんでしょ？「あぁなるほど詩該、やっぱり頭いいね。君たちの予想は大体正解だ「ってかあいつからも少しだけヒントみたいなこと貰ったんだっけ、まぁあの事件の真相は簡単に説明すると佐藤、君を守りたいBさんは複数で君を殺したいAさんも複数だそして僕と佐久間は君を死なせたくないけど殺したいCグループ、つまり全て複数犯だ「ひとまずあの事件の犯人の動機はそんな感じで君が死んだという事実の捏造「あとあの死体は君の髪の毛一本から作り出したクローンで現代技術の賜物らしい、そんな事も容易く出来ちゃう様な事が起こってるって事だよ「あの美形の魔術師の存在がやっぱり気になる？あいつは自分から自己紹介したいだろうからまた今度ね。なに、すぐ会えるさ「んでさっきいったA、B、C、グループの説明をしようか「まずAグループこいつらは君をある抗争、まぁこの抗争については一番最後にかっこよく説明するよ「話を戻すよAグループは抗争が始まる前にある条件下で超厄介な君がこの抗争が始まるまえにどんな方法を使ってでも消してやろうという過激派、BグループはAグループと思想は似てるけどこのグループは穏便派でこの抗争の管理者にお前が参加不可能と見做させることに重きを置いた、多分警察の事もしっかり警戒し考えたんだろうね、んでCグループ僕たちだね、僕たちは実はかなり酷い考えだから落ち着いて聞いてね「君たちがこの抗争に参加してすぐ直後まだ自分の異能を『認識する前に潰そう』という合理的思想だ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

八代は時々俺と試の質問を聴きながら口早にそう説明した。
「そういうことだ」
「敵じゃない」
少し怒ったように試みは小さくそれでいて大きな声で呟いた。
俺ももそう思った、いやお前ら敵じゃん。あと佐久間、ちょいちょい八代が説明している間によくわからない相槌を入れるな。
「だからさっき言ったろ今は敵じゃない、まぁ半日前は潰そうとしてたけど」
軽い事のように少し意味がわからない事を言う。
潰す、っていうのは殺すってことか？
俺は少し怒りを覚えながらそう単純な問いをする。
「いや違う違う、そんな物騒な勘違いをしないでくれよこの抗争はある条件で脱落するんだそれも説明するって」
他になにか特に気になった事とかはないか、と続けた。
「・・・どの位の範囲でこの抗争に参加してるの」
「わかりにくい質問をするなよな、どのくらいの人数、何万人とか何百人で場所の範囲はどのくらいの規模か地球範囲かはたまた日本限定か、こう聞きたいの？」
「その答えは俺がいってやろう、俺たちの行っている学校限定だ人数は大体２００人ある条件が整った生徒がこの抗争に参加している」
何故か佐久間がそこで口を挟む、多分そろそろ真面目に行こうと思ったのだろう。
真実か？
「真実だよ」
なんだそれは、まるでアニメとか中二病な誰かの妄想のようじゃないか。
「学園異能力バトルね、青春のかほりがしてきたわね」
「その通りだ楽しくなって来ただろう」
あぁ最高だ。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「説明を再開するよ、どこまで説明したかな。そうだ僕たちが半日前までは君たちの脱落を狙ったって所からか、まぁそう睨まないでよ「ここで予想がもう付いているだろうけど昼間君たちが見事撃退した彼はCグループ僕たちの仲間だ。彼の名前位は明かしてもいいだろう、遠野だ一組の「僕たちは五組だから君たちはあんまり認識はないだろうね、それにあいつはなかなか登校しないから顔もあんまり見ないだろうね「因みにこのA、B、Cグループのそれぞれの規模はAグループは３０人程Bグループは５０人僕リーダーのCグループは１０人って規模、まぁ残りは無関心グループかな「こう聞くとゾッとしない話だよね、凡そ３０人に命を狙われてたなんて「ここでそろそろこの抗争での君の重要性を明かすよ、数字で表すのが楽だね、もし君が自分の異能を自覚して施行するなら『一万』とする、そしてこの抗争での一般的な生徒が万全に異能力を引き出した数値として『０．０１』、つまり君が本気を出したら全員で掛かっても余裕で瞬間的に全員平伏せさせることが可能ってこと「わかったよね君の重要性、１００人程がこぞって君の対処に借りでる理由も納得だろう「そこでだ、ここからがこれから大事な問題だA、B、Cグループでの抗争はAグループが殆ど完全に負けBグループが勝って作戦が成功、すると思われたがAグループの最後の抵抗でBグループの作戦は中途半端に終わった、そして今日君が学校に堂々と登校したことで存在が管理者に知らされBグループの作戦は惜しくも失敗、ということでこの抗争の開始が知らされた、そこでCグループ、まぁ僕たちはこれは占めたと思い君らの襲撃に移る「只ここで予想外な問題が生じた「詩該、君の存在だ。予想外な事に君はもう自分の異能力を自覚し八割は使いこなせていた。と、この詩

該からの防衛で僕たちの目論見も終わりを迎えた「ここで全グループの作戦は全て失敗を迎える、そしてあいつらもそこまで馬鹿でもない。つまりあいつら及び僕たちは次の作戦を立てる「A、Bグループは同盟を組み君をつぶしにかかる、そして俺率いるCグループはこう判断する。佐藤自信と同盟を組み積極的に君の能力を覚醒させようって線だ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

１０（後書き）

なんか楽しくなってきた

11（前書き）

なんだか執筆が楽しい

11

とりあえず唖然として騒然として吃驚して落ち着いて吃驚を繰り返す。
あれ？俺って主人公？
「その通りだ、まるでお前を中心として異常に入り組んだ学園異能力バトルだ」
「ヒューヒューにくいねぇ！」
黙りなさい、悪乗りをするな。俺は今ちょっとだけ混乱しているのだから。
絶望したように頭を抑え独り言のように男二人を黙らせる。
どうやら最近は主人公っぽくない主人公という物が流行ってるというのは本当のようだった。
「というかそれより一番大事な事を聞いてないわ、この抗争が結局何を目的としてるのかとか誰が主催者なのかとか」
割と反応が薄い試にちょっとしょんぼりしたのは内緒である。
「まぁちょっとまってよここで一応君たちからの質問タイムだ、なにか気になった点は？」
俺から質問だ、A、Bグループはどのような手で持って俺たちを襲撃すると思う？
「いい質問ですねぇ！多分単純に考えるなら君らが寝ている時間だろうね、つまり最短で考えるならそろそろくるんじゃないかな」
ちょっとした物真似をしたそれにつっこもうとしたがなにやら軽い感じで結構重要なことを言いやがった気がするから一応俺はこう聞き返した。
今なんて言った？
「いい質問ですねぇ！」
そこじゃねぇよッ！
少しだけ予想していたボケにやはり予想した突っ込みをかました次

の瞬間、極一般の家庭では聞きなれない戦場的な音が響く。
爆発音、の次に何かが外れて吹き飛ぶ音。その音の正体は何かを起爆させて家のドアを吹き飛ばしたのであろう音だった。
ここでちょっとした補足を加えておく。
実はうちの間取りは今俺たちがいるリビングと玄関は一本道のような直線でつながっていて間に廊下があるといった形である、ここで当然ながら外側からの爆発でドアは内側へ吹き飛ぶ。
そろそろ予想がついてるだろうけどドアがリビングに吹き飛びドアが超回転しながら今俺に当たりそうな瞬間その時なのである（ふと考えたがこんな事ってありえるのか、正に悪運が強いといったところだ）。

ここで話を戻そう、俺は瞬間的に思考する。
そうこれは八代の見事な予想通り、ＡＢグループの襲撃だ。
だがこれはおかしい、普通だったら我が幼馴染であり天才であり光を操れる試なら襲撃がある前から防ぐことは容易だったはずだ、文字通り何か異変でもない限り。
一瞬にも満たない間で試を分析し考える、目が虚ろでありなにも考えてないような、所謂レイプ目になっていた。
異常も異常である、何時からこの状態だったのだろうか。更にに短い間で試がこんな状態になっていることを悟るべきだったと悔やむ。
だが敵も考えた物だと同時に馬鹿みたいだが感心した、確かに一番厄介な試みを一番最初にどうにかするのが先だろう情報も早いものだ。
頭もあれば情報を集める足もある実力行使の腕もある、体は謎だが大したものだ。
だが俺が今、正に死にそうなのに八代と佐久間は何をやっているんだろう。
余裕そうにお茶を飲んでいた。
いや、ここでまた瞬時に考える。どちらかというと俺は主人公とい

うよりは悪役だ、見る方向を変えれば確かに主人公だが見る方向が悪役目線に見られてるほうが多い。
ということははっきり言ってこの二人は俺が死んでもどちらでもいいのだろうと、寧ろ守る必要がなくなってラッキーとか結論をだしてるのかもしれない。
それとここまで瞬間的に考えてわかったことがある、これは走馬灯だ。

あ、これ死んだな。

バチンッ、と頭に移る衝撃と音で目が覚める。
叩かれた。
「何寝てんのよ大事な話の最中でしょうが」
はい、ごめんなさい。
夢落ちだった、どうやら体はしっかりと目的を達成できたであろう心構えだった。
夢だったけど。

11（後書き）

夢落ち一回やってみたかったんだよね

12

えっと、俺はどのくらい寝ていたんだ？
申し訳なさそうに試にそう尋ねる。佐久間と八代は実は夢の内容でちょっと信用度が落ちたのはここだけの話である。
「言うほど寝てなかったわよ、１２時間くらい」
えぇえぇ？・・・いやえぇえ！？
久しぶりに声を荒立ててみる、ちょっと実際嘘なのかわからない。うちのカーテンは真っ暗なの使ってるし、時計はこの前壊れた。
「安心していいよ１０秒間くらいだと思うから」
横から八代がそう訂正してきてくれる。少し状況が変わっただけで冷静さを失うのは俺の悪い癖だ、見直そう。
「真面目か…」
定番のツッコミをちょっと抑えた風味でしたのは誰だと言う事はないだろうが、俺の思考を読み取る（仮）ことが出来る八代であった。
「まぁそれはそうと」
試が場を持ち直そうと一言そう言い話し始める。
「今話した話が本当ならまず味方たる信頼を勝ち取る作業をしたらどうかしら？」
今やっとわかったことだが多分俺は八代の衝撃発言を聞いて少し気を失ってしまったようだ、なんとも不甲斐ないというかチキンか俺は、鳥肉か俺は。
「勿論それをさせてもらおうと思っていた」
自分の事を鳥類に分類してる途中でも話は進んでいた、因みに今のは佐久間。久しぶりの発言である。
「俺の能力は説明しづらいがな」
ちょっと待て。
俺はここで分別の作業を終了して会話の流れを止める。
俺の寝てる間に話したのなら申し訳ないが、そもそも能力とはなん

だ、その上にまだ抗争のしっかりとした事を聞いてないぞ馬鹿野郎、このやろう。
一息でいい終わり、試が本当に偶にしか見せない間抜け面を（正直かわいい）した後にあぁそうかそういえばと納得したような顔をした。
「私としたことがうっかりしていたは、そういえば聞いてなかったわね。説明して」
気のせいだろうか、今この瞬間誰かが惜しいなーといった様な心の変化を見せた気がした、いや俺にそんな観察力もない。それに後で試に聞けばいい話だ、と勝手に納得してまた会話に入った。
「あぁ、ごめんごめん忘れてたじゃ説明するね。今回は普通に長い説明の最中でも質問してもいいよ。」
そう前置きして、手元にあるさっき継ぎ足したであろう麦茶を一口呷り話し出した。
「まずね、この抗争の主催者はね校長だよ」
ストップだ、ストップ。
「私からもストップコールさせていただくわ、確か校長は死んでる所を私は目撃したわけだけど」
俺もな。
「あぁよくあることだよ、なんかこの抗争が始まる前から割とそういう事は盛んに目撃されてたんだけどね毎回必ず校長は普通に学園集会にのこのこ出てきて長ったらしくてありがたいお言葉を平然とくれやがるからね。多分今回も生きてるよ」
え？そうだったの？
そんな不思議学園だったの俺の行ってる学校。何度でも蘇る校長とかラピュタかよ。
「あぁ私も割と聞いた事があるわ、納得」
納得なんだ…、俺は全然全く持って納得できないけど、とか思いながらまぁいいやと何処かで納得して話の続きを聞く。
「話を続けるよ、それでその不思議さんの校長が主催者のこの抗争、

校長本人はこの抗争自体『ＧＡＭＥ』って読んでるから実際公式的な正式名称はＧＡＭＥなんだよね」
ガメ？聞いたことないなぁそんな熟語。と八代宛に勝手にボケてみたが一捌しただけだった、しょんぼり。
「…それでそのＧＡＭＥなんだけどね、趣旨は単なる殺し合いだ。でも殺し合いって言っても実際には肉体が死んだら脱落ってだけで簡単に言うならホテル？みたいなとこに飛ばされてまた元通り肉体が戻って修学旅行状態になるらしくてね、意味不明だよねほんと」
うん、ほんと。
「あぁそれで殺すってわけじゃないって事ね、でも実際殺すってことじゃない」
最初の方に話していた内容を思い出したのかそうぼやく。
「まぁまぁ実際人生が終わるわけじゃないんだからいいじゃん」
プライドが低く合理的な俺は確かにと軽く納得しといた。
「それでその修学旅行状態のホテルはどうやら別空間らしくてね外部とは連絡不能、外にも出れないみたいな所らしい、まるでハルヒに出てきたあの雪山の館みたいだね」
「良い例えを言うなー八代ー」
いきなり話に入って顔をめっちゃ八代に近づけてデレデレする佐久間、正直謎である。
うるせぇよ、とよくわからないボケに対しては俺も適当に突っ込むのであった。佐久間のキャラ付がどんどん意味のわからない方向に向かって行くようで不安なこの頃。
「まって、外部と全く連絡取れないのになんでそこに行くってわかるの？」
俺と佐久間が変なやり取りをしているとなにやら考えてたらしい試が不意にそう聞いた、そういえばそうだなと俺も思ったりした。
「あぁ自称魔術師の遠坂が調べてくれたよ」
「奴は基本的にオールラウンダーだからな、魔術師というのもわかる」

なるほど。
「…まぁ納得かしら」
話続けていいぜ。
正直まだあんまり面識ない遠坂のことはなんとも言えないから俺と試がこんな空気になるのはわかるが、話したがりの佐久間と八代までこんな反応なのはなんだろう？と多分試も思ったであろう事を俺も軽く思考したが、めんどくさくなりそのへんに放り投げた。
「うん、それでそのホテルみたいな空間はこのＧＡＭＥが終わったら崩壊して中に居た生徒は全員無事にまたこの学校に登校出来るんだって、これは校長本人から聞いた話だけどね。まぁつまりこの抗争は殺し合いをする生徒を面白おかしくみるっていうのが目的で校長が始めたって事さ」
校長怖いな、ってか外道か。
とかつぶやきながら不意に思ったけど校長は一体何者なんだろう、それこそ神様（俺のイメージとしては神がそんな屑野郎ではないのでどちらかというと魔王）とかか？
とここで校長がそんな人外である可能性を思考しだして不意に一瞬だがデジャブが起きた。
前にもこんな事無かったか？というか少し考えればその可能性も十分にありえる、つまり何度も生徒の記憶を消してはこのようなＧＡＭＥを始めさせるという可能性、無限ループ、この学校に閉じ込められている気さえしてきた。
実際もしもこんな事が無限ループになってても俺にとって問題はないんだから問題無しだがな、と軽く考える。俺は合理主義者でプライドが低いのだ。
と一人考えてると、
「僕は真っ平ごめんだけどねそんな地獄…」
と、若干顔を青ざめた八代が小さくつぶやいていた。
「どっちかっていうと楽園だろ」
と今度は俺のひねくれた考えを読んでか自称キチガイがそんなキチ

ガイめいた事をつぶやいていたがなんかもう、疲れたからスルーすることにした。

続く

13

俺、佐久間、八代が少し宗教的な事を言った直ぐ後、続きが気になると言った感じで試が声を上げる。
「それで目的とかはわかったのだけど、ある意味一番の問題は能力よ。もしかして何か基準とか合ったりするのかしら？」
あ、俺も気になるぞ、むしろ俺が一番気になる。
なんて言ったってこのＧＡＭＥ俺が能力を自覚さえすれば直ぐに終わるのだ、なんせ常人の１００万倍は力があるのだからな！
「能力ね、能力かぁ。実際まだ結構謎だったりしてんだよね。考えたのは勿論校長なわけなんだけど、校長はエンターテイナーみたいで能力云々は全く明かしてくれないみたいでさ、まだ自覚してる人も３割くらいなんだ」
「それは残念」
あんまり残念そうには見えないにこやかにそう言う、きっとそういうのも楽しんでるんだろう。
「だが推測だが、多少個性とかが関わってるようだぞ」
そうなのか八代？
「あぁ割とあるかもね」
まじか、じゃ俺の個性から少しずつ考えていけばわかるかも知れないな。
少しだけ思考する、俺の個性。はっきり言って自分でわかるものでもない、しかも割と俺のキャラは直ぐに変わってしまう。あ、試に聞くか。
そう結論が出て試に声をかけようとするが丁度悪く試は疑問を八代に投げかける。
「例をあげてもらえると分かりやすいのだけど。例えばあなたたちの能力とか」
「いいぞ、教えてやろう。俺の能力は簡単に言って大嘘憑きだ」

この言い方は、ダウトだな。
というかこいつらは教えてくれるのだろうか、確か最初の方ではっきりと教えるわけないだろばーかって言ってた様な気もするし。
「やっぱり本当の事は言わないのね、答えは少し予想が出来てるけれど八代君にも聞いておこうかしら」
やはり試も同じ事を思ってるのだろうか、そう悪魔で確認の為といった感じで聞く。
「勿論教えないよ」
一応理由を聞くが、なんでだ？共同戦線張るんだろ。
「敵を騙すにはまず味方からっていうだろ」
「ニュアンスは大体あってるけど正確に言うなら君たちがもし捕まって拷問でもされて根堀り葉堀り知ってる事吐かれたら僕たちが必ず不利になるだろ。ここが最大の譲歩だよ」
拷問なんてそんな大袈裟な、実際に死ぬわけでは無いのにそんなめんどくさいことするか？
「あー、言い方が悪かったかもだね。捕まって拷問される事のついでに吐かられたら困るって事だよ」
…なるほど。
「この学校っていろんな方面に突飛として危ない奴が多すぎるもんな」
お前も言えないけどな佐久間、とは言えなかった。
はっきり言ってここにいる奴は全員普通じゃない奴らだろうからだ、墓穴は掘りたくない、掘るのは男の娘の穴だけで十分だ。
「それはそうと拷問なんて怖いわね」
それを趣味とする奴が沢山この学校にいると分かってしまってる現実は更に怖いね。
兎に角そこだけは油断しない様にしよう、と一応誓っとくのだった。
「その通り、割とこの学校は危ない。まぁ話を戻すとそんなわけで一応形だけでは共同とするが詳しい情報の交換は無しだ」
それは…手を組むと言えるのか？

「言える、でしょうね」
「いざという時には手を組もうぜって事だ」
なるほど、戦力の共同って感じか。
それははっきり言って微妙じゃないか、このＧＡＭＥは絶対情報戦だ。というかはっきりいってよくわからないモヤモヤ感も実はある、こいつらの話には矛盾がどこかにある。
どうするんだ試？と、目で確認を取る、言わばアイコンタクトを取る。
対する試は目で勿論、こう言っていた。

「却下よ、貴方たちとは手は組まないわ」
凛と、だって嘘ばかりじゃないとも付け加えていた。
予想通りだが少しため息が出てしまうよ、いやほんと。

1

「それは残念」
八代が苦笑いで、にははという笑い声が似合いそうな顔を浮かべる。
ここまでは想定内というか当然の流れであり予想外など普通はありえない。
俺はこのままこの二人は普通に帰って普通に明日から学校へ、いや学校はあるのだろうか、まぁそんなことは割とどうでもいいことだが。
要はだ、普通にこいつらは「もう夜遅いから帰るわ」とか言って帰っていくのかと思っていた。

「本当に残念」
全てが一瞬にして豹変した。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

まるでこの言葉が合図であったかのように夢でみたように、まず玄関から爆発音が響く。
あれデジャブ？
俺はそうつぶやきながら少しの動きで飛んできたドアを避ける、だが問題はここからだ。
もしさっき見た夢がデジャブなら次に敵はどう来る？と考えるまでも無く体が動いていた。
逃げよう。
真っ先に試の容態の確認をする、単なる夢オチだと思っていたあれ

はもしかしたら俺の予知能力かなんかかも知れないからだ。ドア飛んできたし。
見事な迄に夢と同じレイプ目、畜生！微妙な能力だなっ！！
佐久間と八代は敵だ、一時でも信じた俺が馬鹿だった畜生。なんでこいつらの説明に勝手に納得をしていたんだろう。
取り敢えず落ち着く為にこいつらに悪態を突きながら、試を肩に担ぎ窓を自分が思うよりかなり早く開け放つ。
次の瞬間飛び降りる。
今更だが俺の住んでる階の事を一言説明しておこう。
６０階である、地上約１００ｍ。

飛び降りている間に少し考える。
あーこれ死んだな、後これは絶対夢オチじゃないし多分あいつらの言っていた事８割嘘だし俺の人生もここで終わりか。
自分の人生なんていい人生だったか悪い人生だったかなんか全くわからん。
が、不満足極まりない。負けたみたいに負満足みたいな。
まぁ、
「勿論まだまだこれからよ！」
その通りだ！
レイプ目からしっかりとした真の、芯のある目を取り戻し凛とそれでいて嬉しくて仕方ないかの様に叫ぶかの様に宣言する。俺もその雄叫びの様な試の言葉に呼応するかの様に楽しそうに叫んでやる。
楽しい、なんて、青春なんだろうか。
そんなわけで実は全て予想通りであり試の能力により１００ｍ直落下は無事に着地して終えた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

僕は詩該さんと佐藤君が二人して仲良く飛び降りていった開けっ放しになった窓を只眺めていた。
「やっぱりバレてたね」
「あいつらは割といつも予想外だ」
佐久間君は自分の能力である偽物数体を消しながら声を低くしてそう呟く。
「完璧だった筈だけどねー」
僕ら今回の目的は簡単に言うとこうだった、殺せれば１００点何か傷を負わせれば８０点、そして嘘を信じてくれれば及第点。
「多分これだったら及第点だな」
「どうだろうね、侮れないからね。嫌、でも流石に気づかないかなー」
全てがまるっきり作り話でってことはね、そうちょっと得意げにつぶやいてみる。
「なかなか今回の嘘は楽しかったな」
君だけだよ楽しいのは…まぁ仕方ないかなこれからの事考えたらね。
「まぁ気楽に頑張っていこうよ、このＧＡＭＥには全てが掛かってるんだからね」
「そうだな…」
実際全てが嘘って訳ではなかったりしたのだ、そうＧＡＭＥは存在する。
だがＧＡＭＥの内容に嘘を交えた、規模と脱落条件だ。
予想出来てるかも知れないが脱落条件は死ぬこと、勿論これは人生が終了することである。
そして規模は、
世界規模である。

1（後書き）

本編スタート？
はっきりいって行き当たりばったりすぎる位にここまで進んできてしまった
ここまで来たら完結まで頑張ろうかな！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7005r/

『GAME』とか…中二病か内の校長は…

2012年1月14日02時47分発行